

氏 名 田村 卓也

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2209 号

学位授与の日付 2021年3月 24日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用にかんする生態人類学的研究—かご漁を事例として—

論文審査委員 主 査 小野 林太郎
地域文化学専攻 准教授
鈴木 英明
地域文化学専攻 准教授
飯田 卓
比較文化学専攻 教授
秋道 智彌
山梨県立富士山世界遺産センター 所長
中村 亮
福岡大学 人文学部 文化学科 准教授

博士論文の要旨

氏 名 田村 卓也

論文題目

ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用にかんする生態人類学的研究
—かご漁を事例として—

アフリカでは、各地の多様な水域環境において漁撈活動が展開されている。域内における水産物需要は全体的な増加傾向にあるものの、狩猟採集や農耕、牧畜といったほかの生業にくらべると、アフリカにおける漁撈をとりあげた研究の蓄積は少ない。本論では、ケニア共和国沿岸南部の海村でおこなわれている、魚類を対象としたかご漁をとりあげる。投資規模の小さな零細漁業者たちが、金銭に頼ることなく漁撈活動を成り立たせ、漁獲の向上や安定化をはかろうと展開するさまざまな取り組みを詳細に記述する。そのうえで、日常の漁撈活動を、ローカルな自然・社会環境にねざした漁法開発の場として評価する意義を提示することが目的である。

本論は、全8章で構成される。第1章では、研究目的を示したうえで、先行研究を整理し、アフリカおよびケニア沿岸部における零細漁業の現状と問題点について述べた。

第2章では、スワヒリ海岸とよばれる東アフリカ沿岸部と、本論の調査地であるワシニ島のワシニ村の歴史や社会について概観したのち、村内のほぼすべての世帯を対象とした聞き取り調査で得られた資料をもとに、生計維持手段としての漁撈の位置づけを明らかにした。

第3章では、村をとりまく自然・社会環境の特性をふまえつつ、ワシニ村の漁撈の特徴を示した。住民が日常的に利用する漁場は、島周辺の比較的浅い水域に集中しており、少人数での操業を基本とする。村内でみられる漁法の種類はさほど多くなく、高価な漁具はほとんど普及していない。住民たちにとって、魚は重要な食料であるものの、年間をとおして漁撈で収入を得る者が少ないこともあり、村内における鮮魚供給は不安定である。漁獲流通は、本土の魚商人に大きく依存した形で成り立っており、ワシニ村の漁撈は産業として組織化されているとはいえない。

第4章以降では、かご漁をおこなう3組の漁業者を対象とした参与観察で得られた資料を中心としながら、漁撈活動のプロセスについて詳細な記述をおこなった。第4章では、調査期間中における対象者らの出漁概況を示したのち、漁獲と操業形態について考察した。漁業者たちは、島の地先海面と沖合で資源分布が異なると説明するが、漁獲の分析からは、両漁場における漁獲量には明確な違いを見出すことはできない。いっぽう、沖合の漁場では、高値で売買される大型の魚がひんばんに漁獲されている。地先海面で操業する漁業者たちは、単独で操業することが多いのに対し、漁撈への経済的な依存度が高い漁業者たちは、沖合の漁場において2人1組で操業する傾向がある。彼らは、2人1組で操業することによって、漁の準備にかかる負担を軽減し、地先海面を利用する漁業者よりも多くのかごを設置しようとする。

第5章では、漁具の製作と改良の動きについてとりあげた。かご漁に用いる漁具は既製品が流通しておらず、漁業者の多くは村周辺で伐採した木を用いて漁具を自作する。近年、村内では人工的な素材を用いたかごや、一人では運搬するのが困難なほどの大きなかごを製作する者があらわれ、前者のかごは模倣によって漁業者の間にひろまった。かごは流失や破損のリスクが高く、長期間使用し続けることのできる漁具ではない。現在のところ、所有するすべてのかごを改良品へと置き換える者はおらず、漁業者たちはその効果をみきわめながら、慎重に漁具の改良を進めている。

第6章では、餌の採集と利用についてとりあげた。ワシニ村のかご漁では、用いる餌の種類と量が漁獲を左右する重要な要因になると考えられており、漁業者たちはそれぞれの漁場で効果的な餌を確保するために、ときに操業以上の時間を餌採集に費やす。漁獲量と餌重量との間には、漁業者たちが説明するような相関性を見出すことはできないものの、彼らは餌の効果に大きな期待を寄せている。漁獲対象へと直接的な働きかけをおこなうことのできないかご漁において、餌の利用は魚をかごへと誘い込むための数少ない手段である。漁業者たちは、金銭のかわりに時間と労力を投入することにより、こうした手段を活用しようと試みている。

第7章では、漁場利用についてとりあげた。漁業者たちは、かぎられた数の漁具を効率的に用いようと、破損や流失のリスクを考慮しながら計画的に漁具の製作や修理を進め、なるべく漁場に設置するかごの数を減らさないようにする。操業ではまず、自身の漁獲や周囲で操業する他者の動向を手掛かりとして、漁場内における魚群の動きを予測したのち、海草藻場や岩礁の切れ目など、魚が集まりそうなポイントを選定して漁具を設置する。ポイントの選定はあくまでも先着順であり、他者が先行して設置しているかごのすぐ近くには、あらたに漁具を入れないことが慣習となっている。他者との漁場利用競合は、自由な操業を制約することもあるが、他者の動向を観察することによって得られる情報は、魚群行動を予測する手掛かりにもなる。かご漁をおこなう漁業者たちは、年間をとおして比較的狭い範囲での操業を続けることにより、操業のみならず、漁具製作や餌の利用にもかかわる、ミクロな漁場環境の特性を熟知していく。

第8章では、ここまで述べてきた漁のおこないかたについて整理したのち、漁獲の向上や安定化をはかろうと展開されるさまざまな取り組みが、個人あるいは地域の漁業者たちにとって、いかなる意味をもつのかについて考察した。漁業者たちは、漁獲と直接的なつながりを見出せないような部分においても、大きな時間と労力を投入し、漁獲向上をはかろうとする。こうした努力は、生産性という観点からは不合理なもののようにもみえるが、漁業者たちはそれらを活動の重要なプロセスとして位置づけている。

漁をおこなうにあたり、漁業者たちは一貫して各自の利用するミクロな漁場環境の特性と、そこに生息する魚の生態を念頭に置きながら行動を選択していく。こうした行動は、自身の経験のみならず、他者からもたらされた情報を手掛かりとして展開されることもある。漁業者たちは、会話や観察をとおして得られた情報を、自身の知識や経験にもとづき取捨選択し、価値があると判断した場合には、みずからの活動に取り込んでいく。

個々の漁業者が日常の活動をとおして展開するさまざまな取り組みは、たとえ短期的な漁獲に反映されずとも、長期的な視点からみれば、個人が困難に直面した際にとりうる選択肢の幅をひろげるのみならず、周囲の漁業者たちが互いの知識や技術、経験を共有し、

共同で漁法を開発していくプロセスとみなすことができる。ワシニ村のかご漁では、漁場環境との持続的なかかわりと、漁業者たちの相互的なつながりが、こうしたプロセスに大きな貢献を果たしている。一見すると繰り返しのようにも見える、日常の漁撈活動における漁業者たちの取り組みが、漁のおこないかを少しずつ変化させていく様子については、これまでさほど関心が寄せられてこなかった。しかしながら、こうした点に注目することは、日常の活動にみられる絶え間のない工夫と努力を、内発的な漁業発展をすすめる動力として評価し、アフリカにおける零細漁業の特性とその可能性を探求するうえで、大きな意義をもつと思われる。

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名 田村 卓也

論文題目 ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用にかんする生態人類学的研究—かご漁を事例として—

本論文はアフリカのケニア共和国沿岸南部の海村であるワシニ村でおこなわれる小規模漁業としてかご漁に注目し、徹底的な観察と記録に基づいた生態人類学的な研究成果である。アフリカを含めた世界各地における零細漁業者による漁撈活動を対象とした研究では、パトロン—クライアント関係論に代表されるような他者からの支援に基づく経済的戦略や、収入獲得手段の複合化（＝生業複合）といった面に焦点を当てる傾向が強かった。これに対し、申請者は零細的な漁法であるかご漁をめぐり、これまでの零細漁業研究では看過されがちであった漁具となる「かご」の製作や改良、餌の選択・捕獲といった準備段階までを視野に入れ、当事者である漁師たちがどのような創意工夫や努力を重ねて漁業活動を実践しているかを、詳細な定量的データに基づき明らかにした。

本論文は、序論（第 1 章）と、文献および参与観察をとおして得られた調査地の概況と同地の漁撈活動の概況（第 2・3 章）、参与観察をとおして得られたかご漁についての詳細な記述（第 4～7 章）、そして結論（第 8 章）から成る。

まず第 1 章においては人口増加期・経済成長期における食の安全保障とのかかわりのもとで漁撈研究の重要性が指摘され、就業者数の面でとりわけ重要であるはずの零細漁業について研究蓄積が少ないことが、国内外の先行研究のレビューを踏まえ、指摘される。そのうえで申請者は、投資規模の小さな零細漁業者たちが低コストで漁撈活動を成りたさせ、漁獲の向上や安定化をはかろうとするさまざまな取り組みを実践する漁撈活動として、かご漁に注目する。実際、かご漁はインド洋に面した東アフリカ沿岸部の一帯で広くおこなわれ、ケニアでは海面漁業における総漁獲量の 4 割を占める可能性がある点も指摘される。一方、資源利用の実態や自然認識といった自然との関わりに加えて複数の漁業者の比較という視点が示され、論文構成も述べられている。

第 2 章では、調査地の概況が述べられている。インド洋に面したスワヒリ海岸という位置の歴史的・社会的特性と海への依存、気温の年較差が小さいなかでの降水量や風向きの無視できない季節性、農耕への依存度の低さ、観光への依存度の高さ、漁撈部門における兼業の割合の高さなどが特徴として指摘される。

第 3 章では、調査地の漁撈活動の概況が述べられている。水文環境、季節性、陰暦、海洋公園と資源保護政策、漁獲の販売・流通と自家消費、漁船、タンザニア人の入漁などが述べられている。漁具と漁法に関しては、概略的な記述のみならず、漁業者ごとの個人差や異なる漁具の併用状況、数十年における変化も記述されている。

第 4 章は、調査対象となった 3 つの漁撈ユニットの操業の概要と漁獲分析である。3 ユニットはいずれも専門的にかご漁をおこなう漁師である。同じかご漁ではあるが、各ユニ

ットの漁法は、徒歩での沿岸漁、丸木舟での沖合漁、木造船での沖合漁とそれぞれ違い、かご漁の地域内多様性を検討するうえでも、バランスのとれたユニット選択となっている。漁獲される魚種や漁獲量が季節その他の要因によって大きく変動するなかで、漁業者が安定化のためにとりうる処置として、(1) よい漁場の選定と(2) 価格帯の高い魚種の捕獲、(3) 呪術など超自然的な手段の行使が指摘される。このうち(1)は、(2)を重視しておこなわれることもあるが、そのほかに、価格帯が低くとも自家消費できる魚種の捕獲可能性や、別種の漁撈をおこなう漁場との距離、船の停泊場所との距離なども関係する。また、設置するかごの数の増加は、労働時間も延長されることになり、かならずしも安定化につながるとはいえないが、海況がよい日には漁獲に結びつく。かごの数を増やそうとする漁業者は、1人で操業するのではなく、2人でユニットを組む。さらに、ここでは明示的に述べられていない安定化のための努力として、よい餌の採集がある。この検証は第6章の課題となる。

第5章は、かご漁に用いるかごの物質文化研究の側面からの記述である。とくに、他の地域からの情報についても適宜触れながら、調査地におけるかご大型化の傾向を指摘している。かごの大型化はかごの素材や性能、それを用いる漁場の条件（水深など）、船のタイプなどに大きく影響しており、この傾向が進むと現在のかご漁とはまったく様相を異にする漁法になる可能性がある。小さな変異の累積があらたな生物種を生むのと同じように、小さな改良の累積によって漁撈活動が一新される可能性がここでは指摘されている。

第6章は、かご漁においてかごの設置・回収と同じかそれ以上に大きな意味をもつ餌採集活動についての記述である。たんに、餌を採集する場所や時刻が操業の場所や時刻に影響を与えるというだけでなく、餌採集は、漁獲安定化のために漁業者が積極的におこなうことのできる数少ないアクションのひとつである。とりわけ、良質の餌を一定量集めるために、漁業者が少なからぬ労力をかけ、様々な調整を実践していることが定量的データより示される。特に幅広い生物分類群にまたがる餌の同定や、その生息場所（多くは潮間帯）、利用できる季節、複数の餌の組みあわせなどが記述される。

第7章では、主として海上での観察にもとづいて、漁業者によるかごの設置・回収活動が記述される。この章で提示される資料は、GPSを積極的に利用した調査法によって明らかになったかごの設置・回収の正確な位置と、その理由に関する聞きとり情報である。その結果、かごの設置場所（場合によってはかごの向きも）が魚群行動についての漁業者の予測に大きく関係することのほか、それまでのかごの設置場所やかごの交換時期、かごの流失・破損の状況などとも関係していることが指摘される。

結論となる第8章では、第4章から第7章までに記述された漁業者の行動が、漁獲の安定化という見通しのもとに検討、総括される。調査地においては、漁撈活動のために大きな資本が投下されることがほとんどない。この意味でかご漁は、この地域における漁業のありかたを象徴しているともいえる。すなわち漁業者は、高価な漁具や漁船、機器類の導入によって漁獲を安定化するのではなく、時間をかけて習得した漁法を継続的におこなうなかで「小規模なところみ」を累積させることで漁法の発展・開発を試みている。ここに東アフリカ沿岸でかご漁が主要な漁法の一つとして広くおこなわれてきた要因として、経済的な投資による漁具の現代化や漁業の大規模化よりも、創意工夫による身の回りの自然資源の活用可能性や、漁業者同士の情報交換や模倣・観察などを通じた相互的関わりによって、漁獲の向上や安定化をはかる可能性・柔軟性にある点にあることが改めて指摘され

る。

以上のような視点と構成に基づき論じられる本論文は、まずアフリカの一海村で実践されるかご漁とそれをめぐる人々の活動を記録した民族誌として、貴重な資料を提供している点で高く評価できる。またアフリカにおける小規模漁業のなかでも、従来の研究であまり注目されてこなかったかご漁に注目し、その漁法が実践されていくプロセスを、無視されがちであった餌の探索や道具の製作や改変といった側面も含め、合計 20 か月に及ぶ参与観察で得られた定量・定性的データに基づき論じた点も高く評価できる。特にかご漁に従事する漁師たちが様々に展開する工夫を、ローカルな自然・社会環境にねざした「漁法開発の場」として評価することで、アフリカにおける零細漁業研究に新たな視点を提供した点も優れている。

また本研究をスワヒリ研究の枠組みで捉えようとする場合、対象となったワシニ村の漁撈活動、とりわけかご漁をスワヒリ世界の中に位置づけようと試みた点は高く評価できる。これまで都市や商業活動に関する研究が蓄積されてきたこの分野では、それらと地理的に近接し、密接な関係を有する漁村や漁撈活動に注意を払ってこなかったことが近年、批判的に顧みられている。その点では本研究の試み自体は評価できるが、そこからスワヒリ研究の新たな道筋を示し得るには、まだ至っていない。同じく本論文で間接的にしか紹介されていない「魚食」や「信仰」に関わる事例により総合的な検討が加えられていないことも、漁民社会の研究という視角からみると今後の課題であろう。

ただし、これらの点は、本論文の目的や意義を損なう欠点とまではなっておらず、今後の課題として申請者のさらなる研究に期待したいところである。むしろ本論文は、徹底した長期的フィールド研究により、アフリカの零細漁業研究においてこれまで報告が少なかったかご漁を、定量的分析をもとに徹底的に調べあげた生態人類学のパイオニアワークとして高く評価でき、またその意義を認めることができる。一人の調査では集めにくい複数漁業者の漁業活動のデータや、小型ビデオカメラや GPS を駆使して得たデータなど、正確で良質な一次資料をもとに実証を進めた点も方法論的に完成度が高く、注目すべき事例として評価したい。以上の理由により、審査委員は、本論文が学位の授与に値すると判断した。